

慶應義塾に関連した出版物や教職員の新刊著書などを中心に、本に関する情報を届けします。

## 子どもの言語発達を侵食する

### 「生成AI」利用への警鐘

#### 『言語学者、生成AIを危ぶむ

##### —子どもにとつて毒か薬か

川原繁人（言語文化研究所教授）著  
朝日新書／1045円（2025年10月）



## 教職員執筆の新刊

●井上逸兵（文学部教授）、堀田隆一（文学部教授）著

『言語学でスッキリ解説！ 英語の「なぜ？」』

ナツメ社／1760円（2025年10月）

●小菅隼人（理工学部教授）著

『BUTOH 11人の舞踏家に聞く』

東京大学出版会／7920円（2025年10月）

●合山林太郎（文学部教授）ほか編著

『日本漢文を読む（近世編）（日本語ライブラリー）』

朝倉書店／3740円（2025年10月）

●長谷山彰（学事顧問・名誉教授）著

『罪と罰の古代史—神の裁きと法の支配（歴史文化ライブラリー 624）』

●吉川弘文館／1980円（2025年10月）

●慶應義塾大学教養研究センターホカ編

『エンタメビジネスの教科書—対談編』

慶應義塾大学出版会／2640円（2025年11月）

●藤本秀樹（幼稚園教諭）監修

『水の事故から命を守る—安全水泳大全』

東洋館出版社／2310円（2025年11月）

## 慶應義塾この一冊

### 『福澤諭吉と法典論争』

高田晴仁（法務研究科教授）著  
慶應義塾大学出版会／3740円（2025年10月）

すでに多くの人が日常生活の中でChatGPTなどの生成AIを使いこなしており、「友人」の代わりにAIとの会話を楽しむ人も増えていると聞く。では、言語習得過程にある子どもに「おしゃべりする生成AI」が手渡されたらどういふことが起きるのか？ 音声言語学を専門とし、2人の小学生の父でもある著者はその点に危機意識を抱き、数々の問題点を整理し、明確に示した本書を執筆した。決してAI技術の否定ではない。

今後、私たち大人（親）が生成AIとどう向き合い、使いこなしていくべきか、という提言の書と言えるだろう。



## 法典論争

タイトルにある「法典論争」とは、明治20年代に政府による民法典施行の是非について展開された論争のこと。この論争で福澤諭吉がなぜ「法典延期」を唱えたのか？ 現役の弁護士である著者は、その疑問を出発点に『西洋事情』『文明論之概略』など福澤の著書や数々の一次史料を基に、近代企業法制の形成に対する福澤の真意とその実像を読み解く。各章の末尾に置かれた「Column」が時代背景など読者の理解を助けてくれる。現代の私たちにも「法とは何か？」をあらためて考えさせてくれる一冊。